

キャンプの個別プログラムに対する不登校生徒の評価

奥山 洸¹・諫山邦子¹・加藤敏之¹・齊藤詔司²・菊地和孝²・森 敏隆³

¹北海道教育大学釧路校 ²北海道立厚岸少年自然の家 ³釧路市教育委員会

Evaluation of each camping activity by the secondary school refusers

Kiyoshi OKUYAMA¹, Kuniko ISAYAMA¹, Toshiyuki KATO¹, Shoji SAITO², Kazutaka KIKUCHI² and Toshitaka MORI³

¹Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

²Hokkaido Akkeshi Children's Center, Akkeshi 088-1113, Japan

³Board of Education, City of Kushiro, Kushiro 085-8505, Japan

Summary

The purpose of this study was to evaluate each camping activity, with regard to the effects on the school refusers, who participated in a seven-day camp at Akkeshi Children's Center conducted in 1998.

The behavior of the students before and after the camping experience was evaluated in accordance with 5-item check-list by their teachers. Each camping activity was measured in accordance with the 4-item check list by the students.

The following results were obtained:

1. Cluster Analysis results on students' behavior showed that a higher estimated group and a lower estimated group were divided.
2. Some activities left positive impressions with the more active students.
3. Some activities instilled pleasurable expectations in less active students.

1. はじめに

不適応の児童生徒に対する野外教育のプログラムは、欧米では古くから行われ¹⁾、我が国でも、竹内²⁾や黒田³⁾の先駆的な取り組み以降、少数ながらも実践や研究が持続的になされており、一定の知見が蓄積されている⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾。それらの中で飯田は、不登校の生徒を対象とした長期にわたる冒険キャンプを分析し、心理的・身体的負荷の高いこの種のプログラムが、参加した生徒の自己概念の改善や不安の低下をもたらし、復帰に結びつくことを示している⁸⁾。

この不登校という問題に対して、国や地方自治体、民間の様々なレベルで多様な対応がなされているが、その中で、野外活動の果たす役割が一般にも認められつつある。例えば学校不適応調査協力者会議(1993)⁹⁾は、具体的方策の1つとして、適応指導教室の整備・充実、学校内における多様な取り組みの推進、不登校児童への訪

問指導と共に、自然体験活動や集団宿泊活動を通じた指導を提言している。

また、青少年の問題行動に関する研究会(1998)¹⁰⁾は、各地の公共機関によるこのような取り組みについての悉皆調査(1997年10-12月、プログラム総数170件、参加児童865名、同生徒1,906名、計2,774名)を実施したが、それによれば、プログラム中の野外活動が占める割合は、136件(81.9%)に達しており、終了後の状態が把握された児童生徒1,547名のうち、910名について「状況が良くなった」との回答を得ている。またこのような改善の状況と宿泊日数に相関があることを認め、宿泊数が増えるほど、改善傾向にあることを指摘している。

不登校の児童生徒への対応として、野外活動を含むプログラムの実施が全国的な広がりを見せていることは、不登校問題そのものの深化と恒常化の反映であるとともに、先駆的な実践・研究の成果が確認されつつある状況

表-1. プログラムの概要

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
10 / 13 (火)					開会式	チャレンジ ゲーム		出合いのパーティー			トレッキング 作戦会議			就寝
10 / 14 (水)		町内トレッキング	魚釣り	厚岸湖 カヌー体験			選択活動		夕食		登山 作戦会議	入浴		就寝
10 / 15 (木)		坂登り (中止)	野外炊飯 (中止)				山小屋生活				山の話	自由		就寝
10 / 16 (金)				西別居・摩周岳縦走登山					夕食		リフレッシュ タイム			就寝
10 / 17 (土)				別荘辺半川カヌー川下り				自由	夕食		野外パーティー 作戦会議	入浴		就寝
10 / 18 (日)		乗馬 (屋内に変更)	買い出し				野外パーティー				ファイヤー ストーム	入浴 交流		
10 / 19 (月)		思い出作り	閉会式	昼食										

であると云える。しかし、先の報告そのものが指摘するように、1997年時点で不登校の児童19,498名、生徒74,853名、計94,351名の中で、公的機関によるプログラムが対象とした児童は4.6%、生徒2.5%、全体では2.9%にとどまり、さらにプログラム中の野外活動の割合は先に見たように81.9%、飯田が確実に効果が期待されるとした長期宿泊型は9.9%、冒険プログラムは1.5%にすぎない。

このような状況を背景として、われわれは、1998年に厚岸少年自然の家で実施されたキャンプの参加者である19名の不登校の中学生についての調査を行った¹¹⁾。このキャンプは、先の提言とも呼応して、1997年度より北海道立の青少年教育施設において行われている、不登校児童生徒を対象としたリフレッシュ事業の1つで、6泊7日の長期宿泊型となっており、内容としても負荷の高い冒険プログラムの要素を含むものである。

われわれは、これらの生徒のキャンプ後における日常の行動について、彼らの通級する適応指導教室担当教諭(以下担当教諭)に報告を求め、これにもとづいて5項目からなる行動調査票を作成した。ついでこの調査票を用い、事前と事後の生徒の行動の評定を担当教諭が行った。また独自に開発した29項目からなる自己概念調査票を用い、事前と事後の自己概念を調べた。その他、生徒には個別プログラムに対する評定を事前と事後に求めた。これらにより以下の結論を得た。1) 生徒の評定する自己概念、担当教諭による生徒の行動についての報告、ならび評定結果には、キャンプの効果と思われる肯定的な変化が見られた。2) 学校環境への適応のレベルにより生徒を2群

に分け、自己概念および行動の評定の変化を比べたところ、いくつかの項目で群間の差が確認された。3) このことから、キャンプの与える効果は、適応のレベルに応じて異なることが示唆された。4) 個別プログラムについての生徒の評定をクラスター分析したところ、17件の個別プログラムは、それぞれ整合性のある5つのグループに分類された。

本研究は、先に行ったこの研究を補完することを目的とする。具体的には、同じ資料を用いて不登校の生徒を分類し、その結果にもとづき、生徒の類型に応じた個別プログラムの効果について、先には行わなかった検討を行う。

2. 方法

2.1. プログラムの概要

プログラムは不登校の生徒を対象とし、1998年10月13日より19日までの7日間、厚岸少年自然の家を主な会場として実施された。日程は表-1の通りである¹²⁾。プログラムは19件の個別プログラムからなっていたが、うち2件は雨天のため中止ないし、形式を大幅に変えた。ほぼ計画通り実施された17件の個別プログラムについて、先の報告に欠けていた情報を補いながら以下に示す。

第1日目: 1) チャレンジゲーム; 対人関係能力の改善を図った小集団活動である。「フラフープ」、「日本列島」、「ラインナップ」などのゲームで名前を覚えたり、スキンシップを行う。2) 出合いのパーティー; 対人関係能力の改善を図った小集団活動である。マイグリを用いて班毎に火を起し、カレーライスやフルーツポンチ

を作って夕食とした。

第2日目：3) 町内トレッキング；対人関係能力・自主性自立性・体力の改善を図った小集団活動である。プログラム後半山場の1つである登山に向けて、長時間の歩行に慣れるという目的もある。前夜のミーティングで班毎に自主的に決めたコースをたどり、目標地点である厚岸港のカヌー艇庫まで市街地のトレッキングを行った。所要時間は2時間半ないし3時間半であった。4) 魚釣り；自主性自立性の改善を図った個人活動である。カヌー艇庫に到着した班から、自由にチカ釣りをし、およそ30匹を釣り上げた。釣果は天ぷらに揚げ、昼食のおかずとした。5) 厚岸湖カヌー体験；対人関係能力・体力の改善を図った小集団活動である。プログラム後半山場の1つである川下りに向けた漕艇に慣れるという目的もある。カナディアンカヌーに3名1組で分乗し、静水上での漕艇を行った。6) 登山計画作戦会議；自主性自立性の改善を図った個人活動である。登山コースについてのレクチャーを受け、バックキングなどの練習をした。

第3日目：7) 山小屋生活；自主性自立性の改善を図った個人活動である。西別岳山小屋、および周辺で思い思いに行動した。8) 山の自然や登山の話；自主性自立性の改善を図った全体活動である。山小屋の中で、山岳会会員の登山や山歩きの話聞いた。

第4日目：9) 登山；体力・自己統制力の改善を図った個人・全体活動である。最大の身体的負荷がかかることを意図している。早朝5時に起床し、リスケ山（標高787m）、西別岳（標高800m）、摩周岳（標高857m）の縦走を行った。摩周岳登山のみは自由参加であったが、20名が参加した。全行程は約17km、所要時間は約7時間半であった。10) リフレッシュタイム；登山で消耗した体力の回復と、集団生活で蓄積したストレスの発散を図った個人活動である。それぞれが自然の家の個室で思い思いに過ごした。

第5日目：11) 別寒辺牛川カヌー川下り；対人関係能力・体力の改善を図った小集団活動である。最大の心理的負荷がかかることを意図している。2名1組でカヌーに分乗し、延長9kmの川下りを行った。心理的負荷を高めるために、流水上の漕艇という物理的条件に加えて、交流の少ない、あるいは非友好的な関係の2名を意図的に1組とした。途中、転覆や仲間同士のケンカも生じた。12) 野外パーティ作戦会議；自主性自立性・対人関係能力の改善を図った小集団活動である。野外パーティに向けて班毎に模擬店の準備などを行った。

第6日目：13) 乗馬体験；自主性自立性の改善を図った個人・小集団活動である。心理的負荷の高かったカヌー川下りの後に置くことで、その癒しも目的としている。牧場で行う予定であったが、実際には雨天のため、屋内での乗馬となった。最初は乗り方を教えてもらった後、引いてもらった馬に乗った。次に馬を引く練習をして、2名1組で馬を引いて乗った。全員が慣れたところで、それぞれ単独の乗馬となった。14) 買い出し；自主性自立性・対人関係能力の改善を図った小集団活動である。野外パーティの準備として、班毎に決めたメニューに合わせて、買い物を行った。15) 野外パーティ；自主性自立性・対人関係能力の改善を図った小集団・全体活動である。焼き鳥、ちらし寿司、お好み焼き、豚汁、クレープなどを班毎に作り、模擬店形式のパーティを行った。16) キャンプファイヤー；自主性自立性・対人関係能力の改善を図った小集団・全体活動である。火の入場で始まり、誓いの言葉、フォークダンスと進み、決意表明で終わる総括的活動であった。

第7日目：17) 思い出作り；自主性自立性の改善を図った全体・個人活動である。6日間の活動で最も思い出に残った写真を1枚選び、焼き板、どんぐり、松ぼっくり、小枝を使ってフォトスタンドを製作した。

2.2.調査票および手続き

2.2.1.行動の評定

プログラム実施の1ヶ月後、担当教諭に不登校状態のレベルについての評定を求めた。また同じ時点で、その他の行動面についての所見も、自由記述形式で求めた。この所見をもとに5項目からなる行動の評定尺度を作成し、これを用いた評定を再び担当教諭に求めた。この評定はプログラム実施の1ヶ月半後に行われた。

2.2.2.生徒による個別プログラムの評定

合宿研修開始日、実施が予定される19件の個別プログラムのそれぞれについて事前の期待の程度を見るために、「楽しみにしている活動」、「特に楽しみにしている活動」を選択数や重複記入は制限せず、参加者に選択させた。結果はそれぞれに1点、および2点を与え、選択されなかった活動は0点とした。同じく事前の不安の程度を見るために、「不安に感じる活動」、「特に不安に感じる活動」を選択させ、同様に処理した。また合宿研修最終日、個別プログラムに対する事後の印象を見るために、「良かった活動」、「特に良かった活動」、および「悪かった活動」、「特に悪かった活動」を選択させ同様に処理した。

表-2. 調査対象者

調査対象者 番号 (学年、性)	引きこもり 期間	通級 期間	主な原因 ・要因	適応指導教室担当教諭によるプログラム参加以前の 生徒の状態についての所見
No. 1 (中学2年、男子)	5月	9月2週	複合型	不安による腹痛・たびたびの脱走・怒りっ払い
No. 2 (中学3年、女子)	36月	5月3週	無気力	10日ほどの通級しかたない・家では主に文通
No. 3 (中学2年、男子)	12月	3月	学校生活	学習遅滞気味・生活昼夜逆転・通級不安定・寡黙
No. 4 (中学2年、女子)	5月	1月3週	いじめ・学校生活	通級は週3日ほど・自分の事を話し始めている
No. 5 (中学3年、男子)	断続的	10月	学校生活	学習遅滞気味・非常な幼さ・絶えず悪戯・寡黙
No. 6 (中学2年、男子)	30月	3月3週	不安等の情緒的混乱	当初はたびたび脱走・現在は毎日通級
No. 7 (中学2年、男子)	7月	7月	学校生活	相手を考えみきつい言い方・問題行動・週2日欠席
No. 8 (中学3年、女子)	16月	2月2週	遊び・非行型	通級安定・非行傾向あり・おとなしい生徒に優しい
No. 9 (中学3年、男子)	16月	1月	学校生活	通級は非常に安定・学習や生活の全てに前向き
No. 10 (中学3年、女子)	3月	12月	学校生活	通級は安定・問題行動も多いが思いやりもある
No. 11 (中学2年、女子)	不明	9月2週	いじめ	学力や運動能力が低い・当初分離不安・現在は安定
No. 12 (中学3年、男子)	6月	9月2週	不安等の情緒混乱	通級は安定・自信を持つ・物事を素直に受け止める
No. 13 (中学3年、女子)	3月	11月2週	複合型	情緒不安定・問題行動・動物の飼育の熱心
No. 14 (中学3年、女子)	1月	13月1週	学校生活	通級は非常に安定・当初分離不安・現在復帰直前
No. 15 (中学3年、女子)	1月	18月1週	学校生活	通級は安定・日立つことを嫌う・現在復帰直前
No. 16 (中学3年、女子)	1月	6月	学校生活	通級は安定・社会的・虚言癖によるトラブルが多い
No. 17 (中学3年、女子)	6月	13月	学校生活	起床不安定・元気が自分から集団に入れない
No. 18 (中学3年、女子)	1月	1月1週	学校生活	通級は安定・当初の心因性の症状がなくなった
No. 19 (中学3年、女子)	18月	2週	不明	学力が高い・自分なりの価値観を持つ・現在観察中

2.3. 調査対象者

プログラムに参加した21名の中学生のうち、遠隔地からの参加者2名を除く19名(女12名、男7名)を調査対象とした。19名はいずれも同一の適応指導教室に通級しており、プログラム参加以前、以降の情報を補完できる条件を持っていた。プログラム参加以前の状態についての適応指導教室担当教諭(以下、担当教諭)による所見を要約して表-2. に示す¹³⁾。

プログラム実施の1ヶ月後、担当教諭が行った不登校状態のレベルについての評定によれば、教室への通級が安定せず、遅刻も多い者1名(No.1)、教室への通級はほぼ安定しているが、遅刻が多い者2名(No.2、No.3)、教室へ安定して通級しており、遅刻も少ない者3名(No.4、No.5、No.6)、出身校へ週2日は登校している者3名(No.7、No.8、No.9)、出身校へ登校しているが、毎日ではない者4名(No.10、No.11、No.12、No.13)、出身校へ毎日1-4時間程度登校している者4名(No.14、No.15、No.16、No.17)、出身校へ完全に復帰した者2名(No.18、No.19)であった。

3. 結果

3.1. 行動の評定と生徒の分類

3.1.1. 行動の評定

「他人への思いやり」、「情緒の安定性」、「状況の客観

的な認識」、「自己変革への意志や行動」、および「自己主張や自己表現」という5つの属性について、生徒がプログラムに参加する以前と以後のそれぞれを5件法により評定することを4名の担当教諭に求めた。評定の結果に1点から5点までを与え、さらにそれらを平均した値を個人の得点とした。結果を表-3. に示す。

3.1.2. クラスタ分析

表-3. の値を用いて生徒の分類を行った。都市ブロックを距離とし、最遠隣法によるクラスタ分析の結果を、

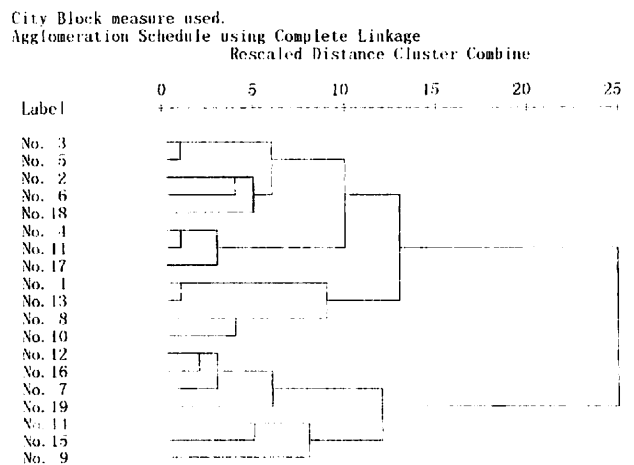


図-1. 生徒の分類

表-3. 適応指導教室担当教諭による行動の評定

対象者 番号	他人への思いやり		情緒の安定性		状況の客観的認識		自己変革への意志や行動		自己主張や自己表現	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
No. 1	2.50	3.00	1.25	2.00	1.25	1.75	1.00	2.00	3.00	3.00
No. 2	1.50	2.25	2.25	2.50	1.00	1.50	1.25	2.75	1.50	3.50
No. 3	1.50	2.50	2.75	3.25	1.25	2.25	1.25	2.00	1.25	3.00
No. 4	2.25	3.00	2.00	3.00	2.00	2.75	2.00	3.50	1.75	3.00
No. 5	1.50	2.25	2.50	3.00	1.50	2.50	1.25	2.50	1.25	2.50
No. 6	1.75	2.50	1.25	2.50	1.25	2.25	1.50	2.50	2.50	3.25
No. 7	1.75	3.00	2.50	3.00	2.00	2.75	2.00	3.75	2.75	3.75
No. 8	2.25	3.50	2.25	2.50	2.00	2.50	2.00	2.75	3.50	3.25
No. 9	3.25	4.25	3.25	3.00	3.25	3.25	2.75	3.75	2.50	4.00
No.10	3.67	3.67	1.33	2.33	1.67	2.33	1.67	2.67	2.67	3.00
No.11	2.25	2.75	2.50	2.75	1.25	2.00	2.00	3.25	2.00	3.00
No.12	2.50	3.75	2.50	2.75	2.75	3.25	2.50	3.75	2.75	3.50
No.13	2.50	3.00	1.00	2.00	1.25	2.00	1.75	2.50	2.50	2.75
No.14	3.75	4.25	3.75	3.75	3.00	3.75	2.25	3.75	3.00	3.25
No.15	4.25	4.50	2.75	2.50	3.00	3.50	2.00	3.50	3.25	3.00
No.16	3.50	3.75	2.75	3.25	2.00	3.50	2.00	3.75	3.00	3.50
No.17	2.25	2.75	3.00	3.00	1.50	2.50	1.75	3.00	1.75	2.25
No.18	2.00	2.00	2.00	2.50	1.50	2.25	1.25	3.50	1.00	2.75
No.19	1.00	2.75	2.50	2.75	2.75	3.50	2.00	3.50	3.25	3.25

図-1.に示す。19名の生徒は、No.1、2、3、4、5、6、8、10、11、13、17、18の12名と、No.7、9、12、14、15、16、19の7名に大別された。前者を仮にA群とし、後者をB群として、表-3.の値についてのα係数を求めると、A群についてはα=.93、B群についてはα=.86という高い値となった。分類の信頼性は高いと云える。

両群の特徴を知るために、クラスター分析に用いた5

表-4. 2群の比較

項目	平均 (標準偏差)		検定 結果
	A群 N=12	B群 N=7	
事前			
他人への思いやり	2.16(0.61)	2.86(1.16)	
情緒の安定性	2.01(0.66)	2.86(0.48)	**
状況の客観的認識	1.45(0.31)	2.68(0.49)	***
自己変革への意志や行動	1.56(0.35)	2.21(0.30)	**
自己主張や自己表現	2.06(0.78)	2.93(0.28)	**
事後			
他人への思いやり	2.76(0.50)	3.75(0.66)	**
情緒の安定性	2.61(0.40)	3.00(0.41)	+
状況の客観的認識	2.22(0.35)	3.36(0.32)	***
自己変革への意志や行動	2.74(0.50)	3.68(0.12)	***
自己主張や自己表現	2.94(0.34)	3.46(0.34)	**

† .05<p<.10 ** p<.01 *** p<.001

種類の評定の事前と事後、合わせて10個の変数について、平均値の比較を行った。結果を表-4.に示す。事前の「他人への思いやり」では有意な差は認められなかった。「情緒の安定性」ではB群はA群よりも有意に大であった(t(17)=2.98,p<.01)。「状況の客観的な認識」ではB群はA群よりも有意に大であった(t(17)=6.69,p<.001)。「自己変革への意志や行動」ではB群はA群よりも有意に大であった(t(17)=4.12,p<.01)。「自己主張や自己表現」ではB群はA群よりも有意に大であった(t(17)=3.52,p<.01)。事後の「他人への思いやり」ではB群はA群よりも有意に大であった(t(17)=3.68,p<.01)。「情緒の安定性」ではB群はA群よりも傾向として大であった(t(17)=2.03,.05<p<.10)。「状況の客観的な認識」ではB群はA群よりも有意に大であった(t(17)=7.04,p<.001)。「自己変革への意志や行動」ではB群はA群よりも有意に大であった(t(17)=6.17,p<.001)。「自己主張や自己表現」ではB群はA群よりも有意に大であった(t(17)=3.28,p<.01)。以上、要するにB群はA群に比べると、担当教諭の見た行動の特性が、事前においても事後においても優れているという特徴を持つ。

3.2 個別プログラムの評定

3.2.1 事前の予想

表-5.1. 生徒によるプログラムの評価 (1)

個別プログラム	事前の期待		検定 結果
	A 群 N=12	B 群 N=7	
チャレンジゲーム	0.58 (0.79)	0.00 (0.00)	*
出会いのパーティ	0.33 (0.49)	0.14 (0.38)	
町内トレッキング	0.25 (0.62)	0.14 (0.38)	
魚釣り	0.92 (0.90)	0.86 (1.07)	
厚岸湖カヌー体験	0.58 (0.67)	0.43 (0.79)	
登山計画作戦会議	0.33 (0.65)	0.00 (0.00)	
山小屋生活	0.75 (0.87)	0.57 (0.98)	
山の自然や登山の話	0.25 (0.45)	0.00 (0.00)	+
登山	0.33 (0.78)	0.14 (0.38)	
リフレッシュタイム	0.83 (0.94)	0.43 (0.79)	
別寒辺牛川カヌー川下り	0.58 (0.90)	0.71 (0.76)	
野外パーティ作戦会議	0.33 (0.65)	0.14 (0.38)	
乗馬体験	1.17 (0.72)	1.43 (0.79)	
買い出し	0.58 (0.67)	0.29 (0.49)	
野外パーティ	0.50 (0.67)	0.57 (0.79)	
キャンプファイヤー	0.83 (0.84)	1.14 (0.69)	
思い出づくり	0.50 (0.80)	0.00 (0.00)	+

+ : .05 < p < .10 * : p < .05

事前の期待では、「チャレンジゲーム」に対する A 群の値が B 群の値よりも有意に大であった ($t(17)=-2.55$,

表-5.2. 生徒によるプログラムの評価 (2)

個別プログラム	事前の不安		検定 結果
	A 群 N=12	B 群 N=7	
チャレンジゲーム	0.25 (0.62)	0.00 (0.00)	
出会いのパーティ	0.00 (0.00)	0.14 (0.38)	
町内トレッキング	0.25 (0.45)	0.00 (0.00)	+
魚釣り	0.08 (0.29)	0.00 (0.00)	
厚岸湖カヌー体験	0.50 (0.80)	0.43 (0.79)	
登山計画作戦会議	0.17 (0.39)	0.00 (0.00)	
山小屋生活	0.17 (0.58)	0.14 (0.38)	
山の自然や登山の話	0.17 (0.58)	0.00 (0.00)	
登山	0.83 (0.84)	0.43 (0.79)	
リフレッシュタイム	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	
別寒辺牛川カヌー川下り	0.58 (0.79)	0.29 (0.76)	
野外パーティ作戦会議	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	
乗馬体験	0.08 (0.29)	0.00 (0.00)	
買い出し	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	
野外パーティ	0.08 (0.29)	0.00 (0.00)	
キャンプファイヤー	0.08 (0.29)	0.14 (0.38)	
思い出づくり	0.00 (0.00)	0.14 (0.38)	

+ : .05 < p < .10

表-5.3. 生徒によるプログラムの評価 (1)

個別プログラム	事後の良い印象		検定 結果
	A 群 N=12	B 群 N=7	
チャレンジゲーム	0.25 (0.62)	0.57 (0.79)	
出会いのパーティ	0.25 (0.62)	0.14 (0.38)	
町内トレッキング	0.25 (0.45)	1.00 (0.82)	*
魚釣り	0.42 (0.67)	0.86 (0.90)	
厚岸湖カヌー体験	0.75 (0.97)	1.43 (0.98)	
登山計画作戦会議	0.08 (0.29)	0.29 (0.76)	
山小屋生活	0.25 (0.62)	1.00 (1.00)	
山の自然や登山の話	0.08 (0.29)	0.43 (0.79)	
登山	0.58 (0.90)	1.43 (0.98)	+
リフレッシュタイム	0.25 (0.62)	0.57 (0.79)	
別寒辺牛川カヌー川下り	0.92 (1.00)	1.57 (0.79)	
野外パーティ作戦会議	0.25 (0.45)	0.29 (0.76)	
乗馬体験	0.92 (0.90)	2.00 (0.00)	**
買い出し	0.17 (0.39)	0.57 (0.98)	
野外パーティ	0.67 (0.89)	1.00 (1.00)	
キャンプファイヤー	1.08 (0.90)	1.29 (0.95)	
思い出づくり	0.75 (0.87)	1.14 (0.69)	

+ : .05 < p < .10 * : p < .05 ** : p < .01

$p < .05$)。「山の話」に対する A 群の値が B 群の値よりも傾向として大であった ($t(17)=-1.91, .05 < p < .10$)。「思い出づくり」に対する A 群の値が B 群の値よりも傾向として大であった ($t(17)=-2.17, .05 < p < .10$)。以上 3 つの差の方向には、いずれも A 群の値が B 群の値よりも大であるという特徴が見られる。有意差の有無にかかわらず A 群の値が B 群の値より高かった項目は、17 件中 13 件、その逆は 4 件であった (表-5.1.)。

事前の不安では、「町内トレッキング」に対する A 群の値が B 群の値よりも傾向として大であった ($t(17)=-1.91, .05 < p < .10$)。有意差の有無にかかわらず A 群の値が B 群の値より高かった項目は、17 件中 11 件、その逆は 3 件、等しい項目は 3 件であった (表-5.2.)。

3.2.2 事後の印象

事後の良い印象では、「町内トレッキング」に対する B 群の値が A 群の値よりも有意に大であった ($t(17)=2.24, p < .05$)。「登山」に対する B 群の値が A 群の値よりも傾向として大であった ($t(17)=1.92, .05 < p < .10$)。「乗馬体験」に対する B 群の値が A 群の値よりも有意に大であった ($t(17)=4.17, p < .01$)。以上 3 つの差の方向には、いずれも B 群の値が A 群の値よりも大であるという特徴が見られる。有意差の有無にかかわらず B 群の値が A 群

表-5.4. 生徒によるプログラムの評価 (4)

個別プログラム	-事後の悪い印象-		検定 結果
	A 群 N=12	B 群 N=7	
チャレンジゲーム	0.08(0.29)	0.29(0.76)	
出会いのパーティ	0.00(0.00)	0.00(0.00)	
町内トレッキング	0.17(0.39)	0.00(0.00)	
魚釣り	0.17(0.58)	0.00(0.00)	
厚岸湖カヌー体験	0.00(0.00)	0.00(0.00)	
登山計画作戦会議	0.00(0.00)	0.14(0.38)	
山小屋生活	0.42(0.79)	0.00(0.00)	+
山の自然や登山の話	0.58(0.79)	0.29(0.49)	
登山	0.17(0.39)	0.00(0.00)	
リフレッシュタイム	0.17(0.58)	0.57(0.98)	
別寒辺牛川カヌー一川下り	0.08(0.29)	0.00(0.00)	
野外パーティ作戦会議	0.00(0.00)	0.14(0.38)	
乗馬体験	0.00(0.00)	0.00(0.00)	
買い出し	0.17(0.58)	0.00(0.00)	
野外パーティ	0.17(0.58)	0.00(0.00)	
キャンプファイヤー	0.08(0.29)	0.00(0.00)	
思い出づくり	0.00(0.00)	0.00(0.00)	

+ : .05<p<.10

の値より高かった項目は、17 件中 16 件、その逆は 1 件であった (表-5.3.)。

事後の悪い印象では、「山小屋生活」に対する A 群の値が B 群の値よりも傾向として大であった ($t(17) = -1.82, .05 < p < .10$)。有意差の有無にかかわらず A 群の値が B 群の値より高かった項目は、17 件中 9 件、その逆は 4 件、等しい項目は 4 件であった (表-5.4.)。

4. 考察

4.1. 2つの群と不登校状態のレベル

クラスター分析により、生徒は行動特性についての低得点群と高得点群の 2 群に分類された。この群化と不登校状態のレベルの間には対応関係のあることが予想される。実際、A 群 (低得点群) 12 名の中で、出身校への毎日の登校が可能者、ないし復帰した者は 2 名 (No.17、No.18) のみであるが、B 群 (高得点群) 7 名の中では 4 名 (No.14、No.15、No.16、No.19) がそれに該当する。phi 係数の値は .42 であった ($.05 < p < .10$)。これは生徒の多面的な行動特性からの出身校復帰の予測が、未だ十分ではないことを意味するが、他方、適応指導という実践的な課題の下で評定を行った担当教諭の視点が、学級と学校への適応を主軸としながらも、生徒の行動特性の評定全般をそれに従属させるような狭隘なものではなかったこ

とを示唆しているとも考えられる。

4.2. 2つの群による個別プログラムの評価

われわれは先の報告で、適応のレベルの高い、したがって出身校への復帰の近い生徒は、キャンプへの参加を契機として積極的な行動意欲にかかわる自己概念に肯定的な変化が生じ、適応のレベルの低い、従って学級への適応が当面の課題である生徒は、同じくキャンプへの参加を契機としながらも、自己主張や自己表現という行動の側面に肯定的な変化が生じることを指摘した。

本研究における個別プログラムに対する 2 群の評定結果もこれに対応した構造を含んでいる。すなわち事前の期待で得られた有意差、あるいは傾向としての差の方向は、いずれも A 群の値が B 群の値よりも高かった。事前の不安で得られた 1 項目の差もまた同様であった。要するに、事前の予想で差が生じたときは、個別プログラムに対する A 群の生徒の反応が B 群の生徒の反応よりも強いことによる差であった。また事後の良い印象で得られた有意差、あるいは傾向としての差の方向は、いずれも B 群の値が A 群の値よりも高かった。事後の悪い印象で得られた 1 項目は A 群の値が B 群の値よりも高いことによるものだった。要するに、事後の印象における差は、個別プログラムに対する B 群の生徒の評価が、肯定的であるか、もしくは否定的ではないことによる差であった。

4.3. 2つの群についての推論

表-2.に見るように両群の通級期間に大差はない (A 群の平均 6.9 ヶ月、B 群の平均 7.9 ヶ月)。それゆえ、事前の予想で A 群の生徒の反応が強いことを、この種のプログラムに対する経験の乏しさに帰することにはならない。あるいはこの違いは、B 群の生徒が情緒の安定性において A 群の生徒に劣ることと関連するものであるかもしれない。一定のストレスの下にあるキャンプ開始直前の調査場面で、そのような生徒が相対的に強い情緒的反応を示すのは考えられることである。差の現れた個別プログラムは、いずれもプログラム全体の中では主要なものではない。おそらく主要な個別プログラムでは、両群に共通する程度の天井効果が生じたため、差が見られなかったであろう。事後の印象における違いは、B 群の生徒が A 群の生徒に比べて、自己変革の意志や行動において高い評価を受け、一般に積極的な行動特性を持つと思われることと直接関連する結果であると考えられる。良い印象として差の表れた個別プログラムは、プログラム全体の中の主要なもの 2 つを含んでいる。楽しむべきときに楽しめるという特性が B 群の生徒にあると思われる。

注及び引用文献

- 1) S. R. スラブソン、小川太郎訳 (1956) : 集団心理療法入門、誠信書房
- 2) 竹内清 (1975) : 学校嫌いはキャンプで治る、黎明書房
- 3) 黒田健次 (1973) : 登校拒否の治療キャンプ、児童精神医学とその近接領域、14、55-74
- 4) 中島利夫 (1982) : 情緒障害児キャンプ療法の試み (1)、保健の科学、24 (1)、54-58
- 5) 池田博和、吉井健治 (1991) : 登校拒否に関する研究 (第Ⅴ報) - 不登校生徒の合宿体験 -、名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)、38、137-154
- 6) 池田博和、吉井健治、桐山雅子、ほか (1992) : 不登校生徒の合宿体験 - 「ヨコ体験」合宿のころみ -、名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)、39、45-61
- 7) 池田博和、吉井健治、桐山雅子、ほか (1988) : 登校拒否に関する研究 (第Ⅱ報) 「タテ関係からヨコ関係への発達における挫折」としての登校拒否、名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)、35、163-174
- 8) 飯田稔、坂本昭裕、石川国広 (1990) : 登校拒否中学生に対する冒険キャンプの効果、筑波大学体育科学系紀要、13 : 81-90
- 9) 北海道学校教育研究会編 (1993) : 続・これからの教育の動向 国、北海道教育関係答申・報告集 : 209-214
- 10) 青少年の問題行動に関する研究会 (1998) : 登校拒否児童生徒を対象とした自然体験活動等に関する事業調査研究報告書、国立オリンピック記念青少年総合センター : 1-52
- 11) 奥山洸、諫山邦子、加藤敏之、齊藤詔司、菊地和孝、森敏隆 (1999) : 不登校状況改善にかかわるキャンプ経験がもたらす心理的、行動的影響、野外教育研究、2(2)、投稿中
- 12) 前掲 11) に掲載済み
- 13) 前掲 11) に掲載済み